

朝日が受容した「善意の批判」で敷き詰められていた『地獄への道』

批判にはたして「善意の批判」と「悪意の批判」とがあるのでしょうか。批判は「善意の批判」と「悪意の批判」に分別される必要があるのだろうか。もし分別の必要があるとすれば、そこにはどのような基準があるのだろうか。自分が受け入れられる批判はすべて「善意の批判」であり、自分が受け入れられない批判はすべて「悪意の批判」なのだろうか。つまり、自分（の判断）を基準として「善意の批判」と「悪意の批判」とに分別されるのだろうか。自分（の判断）という基準を超えたところに、批判というものは位置づけられないのだろうか。いいかえれば、批判が本質的であればあるほど、その批判は自分（の判断）という基準を突き崩して、したがって、「善意の批判」と「悪意の批判」の分別を無化して、自分を含む誰に対しても向けられているものでありつつけるのではないだろうか。

批判はなによりも自分（の判断）という基準そのものに向かわなくては始まらないだろう。批判はもちろん、相手に対する否定を含んでいる。しかし、その否定は相手の中に見出される欠損に対する否定であって、相手そのものに対する否定ではない。もし相手そのものに対する否定として批判がなされるならば、それは「悪意の批判」というよりも中傷であり、もはや批判たりえない。なぜなら、そのような中傷には（相手にとっての）「未来の自分」が映しだされずに、いまの相手の抹殺にしか向かわないからである。

批判は「未来の自分」に役立てられていくような変革を含んでいることにおいて、批判になっていく。だからこそ、相手の中に見出される欠損が「未来の自分」を閉ざしていることに対して、その欠損の除去としてではなく、欠損の変革として批判が行使されなくてはならないのである。欠損を除去してはならないのは、欠損の中に閉ざされているいまの自分を除去することになるからであり、いまの自分がどのようにして「未来の自分」に出会っていくかは、欠損の変革を通じてしかありえない。

繰り返すが、批判には「善意の批判」と「悪意の批判」の区分などありえない。そのような区分をつくりだそうとする自分（の判断）という基準そのものが最大に批判されなくてはならない。区分があるなら、批判と中傷とがあるだけであり、しかし、「悪意の批判」と同様に善意の中傷などありえないことを考えるなら、それは区分などではないことがわかるはずだ。つまり、中傷は怨みや嫌悪感によって相手の報復感情を喚び起こすだけであり、相手が「未来の自分」に向かっていく支えにならず、逆に相手が墮ちていくのを促進させようとするだけである。

とはいえ、中傷を批判と混同することは考えられないが、批判が中傷と混同されることは常であろう。批判が手厳しく相手に感じられるほど、その批判の受け入れがたさから中傷とみなされることが起こってくる。批判が受け入れがたくみえればみえるほど、その批判の細道の向こうに「未来の自分」が遠く待ち受けているにもかかわらず、中傷として聞くように仕向けるのは、もちろん、自分（の判断）という基準なのである。批判を「善意の批判」と「悪意の批判」に分別したり、批判を中傷と混同させてしまうのは、自分（の判断）という基準がそのように仕分けるからだ。だからこそ、そのような絶対的な壁として立ちはだかっている自分という枠組みを突き崩さないような批判は、批判に値しないのである。

朝日がもし「善意の批判」と「悪意の批判」に分別していたなら、それはたかだか朝日が受け入れられる批判と受け入れられない批判とを、企業論理の都合上から基準として設定しているにすぎない。朝日が受け入れられるような批判は未来の朝日にとって批判に値しないのであり、朝日が受け入れられない批判を「悪意の批判」として葬ってしまうなら、朝日は永遠に未来の朝日に出会う通路を閉ざされることになる。

『地獄への道』は善意で敷き詰められているように、おそらく「善意の批判」ばかりに耳を傾けてきた朝日は、皮肉なことに、自社が「悪意の批判」を繰り返すことになって、『地獄への道』を歩くことになってしまったのである。「吉田調書」問題にしても、サンゴ事件にしても、朝日の紙面は「善意の批判」ならぬ、「悪意の批判」で敷き詰められていたからだ。自分の判断で「悪意の批判」を退ける者は、自分が「悪意の批判」と化することを、朝日の今回の出来事は改めて我々に見せつけたといえよう。

こう書きながら、とことん失墜した朝日は否応なしに再生に向かって立ち上がるしかない地点に到

達したのではないか、という気がしている。地獄巡りの果てに天国に接近していくことになるのではないだろうか。朝日の窮状を遠巻きに眺めたり、批判している同業他社が、朝日と同じように「善意の批判」と「悪意の批判」の分別によって自社を保護しているとするなら、少なくとも朝日はそんな枠組みを解体させられて、自分が出会うべき未来の朝日にむかって直進する以外にないどん底に足を踏み降ろすことになったのである。祝福すべきことではないか。

「善意の批判」と「悪意の批判」の分別は企業論理からもたらされるが、ジャーナリズムの論理に立つなら、どんな批判であろうとも、批判はすべて役立つ点でよい批判として受けとめられるであろう。企業論理の立場なら「悪意の批判」としてこれまで掲載されるはずのない読者からの「声」——たとえば、英語塾経営 西河 豊司（京都府 77）——が、9. 18朝日に特集版として掲載されているのは、それほど追い込まれているとしても、ジャーナリズムの論理に立たざるをえなくなっている点で、非常によいこととして受け入れなくてはならないと思う。

《40年ほど前、職場の人たちの影響で朝日新聞の購読を始めましたが、今回、やめることにしました。

友人に朝日新聞をひどく批判し、中国や韓国、北朝鮮のことをよく言わない者がいます。私はいつも辟易していましたが、真実を守ってくれている新聞だと思っていた。

しかし、今回の誤報が各方面から指摘され、謝罪記事を出さざるを得なくなった経緯を知り、友人の方が正しかったのではないかと思うようになりました。特に謝罪記事は読むにつれ、嫌悪感が増すばかりです。ちらちら言い訳が入っていると感じられるからです。

結局、読者のささやかな気持ちを読み取れない新聞社だと感じ、断腸の思いで長年の購読を断ることにしました。どうして断腸の思いかという、これまで楽しい記事がたくさんあり、私をそれなりに成長させてくれたからです。いったん離れた読者を元に戻すのは大変なことですよ。》

企業論理に立とうとしない現場の朝日記者からのツイッターで異論が相次いだことも、朝日の経営幹部をやむなくジャーナリズムの論理へと追い詰めていくことになった。

池上コラム掲載拒否に対して神田大介テヘラン支局長は、「事実だとすれば極めて残念であり、憤りを感じる」「私は言論の自由、表現の自由を愛する者です。それが妨げられたことに憤っています」とツイート。大阪本社社会部の武田肇記者も、「私は組織に忠実な企業内記者の一人ですが、夕方、このニュースを聞いて、はらわたが煮えくりかえる思いでした。極めて残念です（査定に響きませんように…）」と無念さをにじませた。ハフィントンポストに出向中の吉野太一郎記者も、「なぜこんな判断に至ったのか理解に苦しむ」とツイートした。

文春・新潮の広告拒否に対しても、北海道報道センターの関根和弘記者は、読者から、「週刊誌の広告拒否はリベラルな朝日新聞としてはいかがなものかと」と問われ、「広告については同感です」と返信、広告掲載拒否に違和感を示した。デジタル編集部の古田大輔記者は、「私は朝日新聞が吉田証言を採用したことは過ちであり、記事取り消しがいまになったことも大きな過ちであると考えていますし。記者の一人としては、読者の方々に大変申し訳ないと思います。ですが、『慰安婦問題は朝日の捏造』とはまったく思いません」とツイートし、「吉田証言」記事の取り消しに32年かかったことを「大きな過ち」だとした。

楊井 人文日本報道検証機構代表・弁護士によれば、池上コラム掲載拒否に対する自社の《方針に反発した朝日新聞記者がツイッターで憤りや失望のコメントを次々と投稿。（9月）3日午後6時すぎ、一人の記者がコラムが当初の原稿どおり掲載されることになったとツイッターで速報し、同紙のホームページなどでも発表された。

当機構は、ツイッターで実名登録している朝日新聞記者165人の投稿を調査。文春の特報が出た2日夜以降、方針転換が明らかになった3日夕までの間に、掲載見送りの判断に異議や失望など否定的なコメントを投稿した記者は32人いた。同僚や社外の批判的な投稿を転送した記者を含めると、もっと多い。逆に、掲載拒否の方針に賛同した記者は見当たらなかった。

投稿は「はらわたが煮えくり返る」「怒りと情けなさでいっぱい」「すごく悔しく、悲しく、憤りを感じます」と心情を吐露したものや、「もし本当なら言論機関の自殺行為」「度量の広さを示すチャンスのみすみす逃したばかりか、発信力のある書き手を『敵』に回してしまった」などと自社の方針を痛烈に批判するものが多数みられた。「池上さんはじめ、読者や様々な方に、所属記者として心底申し訳ない思いです」などとおわびをする投稿も複数あった。》